Japan Society of Obstetrics and Gynecology

175　運動の母体循環動態に及ぼす妊娠中の変化

和泉市立病院
田村俊次

［目的］近年妊娠中の運動が推奨されているが、その循環動態に及ぼす影響については充分に理解されていない。そこで運動に伴い生じる母体循環動態の変動が妊娠に伴いどのように変動するか観察することを本研究の目的とした。［方法］週2回中等度60分間のエアロビクスを妊娠16週より再開した妊婦(25～35才)8人を対象に妊娠24週・29週・36週・産褥1カ月に後述の運動負荷試験を行った。非妊女子運動選手8人を対照とした。運動負荷試験は、半坐位にて5分間安静を保った後、同姿勢で5分間のペダル運動を行い脈拍数が120BPMになるよう運動強度を調整した。試験中Impedance法とFinapresにより心拍出量(CO)・平均血圧(MBP)を連続的に測定し、両者より血管抵抗(mVR)を求め運動による変化を検討した。［成績］mVRは非妊時15.0±5.09より24週には7.78±9.2(P<0.05)，29週6.65±2.35（P<0.05 ）と有意に低下し、36週には8.08±3.39と若干上昇するものの産褥1カ月でも10.4±3.49と非妊時に較べ低値を示した。運動によるmVRの下降は非妊時8.40±4.18であったが24週では3.57±1.88（P<0.05)，29週では2.17±0.84(P<0.05)と最も少なく36週でも3.56±2.47(P<0.05),産褥1カ月でも3.91±2.66（P<0.05)と非妊時に較べmVRの低下は鈍化していた。しかし運動中のmVR絶対値そのものは非妊時6.60±2.28に較べ24週4.22±0.96，29週4.75±1.37，36週4.52±1.44と低下していた。［結論］運動中は末梢血管が拡張し血管抵抗は低下するが、妊娠中はすでに血管は拡張しており、運動による血管抵抗の低下は鈍化していた。従って妊娠中の運動は循環血液量が増加していることも加味され非妊時とは異なった適応現象がみられる可能性が示唆された。

176　高身長母体は、High-Risk分娩か否か？(高身長母体の分娩に関する検討)

都立広尾病院
海老澤　寛、鈴木　純一、飯塚　貞男

〔目的〕低身長母体は、High-Risk妊娠として、確立されているが、女子平均身長の伸びに伴い、高身長母体の、分娩に立ち会う機会も増加している。今回、高身長母体の分娩に関し、検討を加えたので、報告する。
〔方法〕対象は、当院での、過去10年間の総分娩数5,230件のうち、分娩時、母体身長（H）—168cm以上の128例（a群）で、同期間の155cm≦H≦160cmの128例（b群)、H≦148cmの142例（c群）を対照群とし、比較検討した。
〔成績〕高身長群（a群）の母体平均年令（mean±SD）は、28.7±4.0才、平均身長169.4±1.9cm、母体体重（非妊時）59.1±8.2kg、（分娩時）71.4±8.5kgであった。分娩所要時間10.1±3.1hr、(経腟)分娩時出血量380.4±232.2ml、平均在胎週数39.2±1.5週で、b,c群と差を認めなかった。母体のkaup指数は、非妊時（a群、b群、c群）—(19.6,19.7,19.8)、分娩時（24.7,24.3,25.3）で、肥満度に差はなかった。出生時児体重（g）は、(3314.6,3047.6,2926.9)、児身長（cm）は、(50.1,48.9,48.2）で、a群が、b,c群に比しp<0.01で有意に大きかった。臍帯長（cm）は（60.7,56.8,52.9）でp<0.01で有意差を認めたが、臍帯巻絡率（%）は(36.7,35.2,31.0）で、2回以上の多数回臍帯巻絡合併率（%）は、(11.7,3.9,3.5）で、a群に高率に認められた。分娩時骨盤位の頻度（%）は、(7.0,3.1,6.3)でa群に高率で、妊娠8ヶ月以後の胎位変化率（%）は（8.6,5.5,10.6）でa,c群に高率であった。
〔結論〕高身長母体は、標準身長、低身長母体に比し、児は巨大傾向を認め、臍帯長も長く、多数回臍帯巻絡のHigh-Risk妊婦であるとともに、骨盤位の頻度も有意に高率であった。

NII-Electronic Library Service